

勉誠通信

Bensey Newsletter 第二十四号

2010.8.20

小論・研究余滴・随想

グレートジャーニー
大谷光瑞の魅力

地名研究の恍惚と不安

——「大江山」の場合

随想 仏教の心と私

戸板保佑編

『関流四伝書』を巡って

蒲焼き・柳川鍋・

すき焼き・もつ焼き(二)

——くいものの語源と博物誌——



柴田幹夫

糸井通浩

長野一雄

佐藤賢一

小林祥次郎

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

新刊・近刊ニュース

- ・大谷光瑞とアジア 知られざるアジア
主義者の軌跡
- ・アジア遊学135 『出雲文化圏と東アジア』
- ・『靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・
鬼の日中比較研究』
- ・『仏典説話を現代語で読む』
- ・落語 笑う門 おなじアホなら
笑わにやそんな
- ・早坂暁コレ 『夢千代日記』
- ・『金子みすゞ 永遠の抒情』
- ・ネットワーク時代の『デジタル書物学事始め』
- ・図書館情報学
- ・ネットワーク時代の『情報管理と法』
- ・図書館情報学

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

グレートジャーニー大谷光瑞の魅力

——『大谷光瑞とアジア 知られざるアジア主義者の軌跡』に寄せて——

柴田幹夫

(新潟大学国際センター准教授)

はじめに

『アジア遊学』三十二号で白須淨眞先生は「上原芳太郎の『外遊記稿』」と題する小文を寄稿されているが、ここで白須氏は上原芳太郎（一八七〇～一九四五）を「東洋のイブン・バットウター」と呼んでいる。イブン・バットウター（一三〇四～六八／六九あるいは七七）は、モロッコ出身のイスラム教徒の旅行家であり、アジア各地、アフリカからスペインに至る十二万キロ余りを踏破した人物として知られている。このような大旅行家に比定される上原芳太郎もまたイブン・バットウターに劣らないぐらいアジア各地からヨーロッパにかけて旅行した人であった。旅行を通じて世界を知り、

地理を知り、国家を知り、そして日本を知ったのである。

この上原芳太郎に旅行を命じた人こそ大谷光瑞その人であった。光瑞自身も「大谷探検隊」で名高い一連の調査活動を主宰し、自らも探検活動に加わり、インド、中央アジア探検に足跡を残し、上原芳太郎以上に旅行をした人でもあった。まさにグレートジャーニーとしての面目躍如たるものがある。

今回『大谷光瑞とアジア——知られざるアジア主義者の軌跡』を編集してみ、グレートジャーニー大谷光瑞の実態を驚きと共に再確認した次第である。

北京と旅行をして、国家とは？ 社会とは？ を考える機縁となったことは疑いのないことであろう。その後大谷光瑞の名を世界に高めることになったヨーロッパから中央アジアにかけての「大谷探検隊調査活動」につながっていくのである。もちろんこれらの調査活動は一人の仏教徒として「仏教東漸の要地」を探索することであった。以後も精力的にアジア各地、南洋、トルコなどを回り、当地で様々な事業を現地パートナーと共に興していくのである。

水を得た魚

一九一四年（大正三）五月、本願寺疑獄事件の責任を取り、光瑞は本願寺から出て行くことになる。この疑獄事件とは、本願寺の負債を解消するために、真宗生命保険会社と慈善会から資金を流用したということと、神戸須磨にあった本願寺別邸売却の際に宮内

庁に金品を贈ったということが暴露されて宮内庁を巻き込んでしまった事件になったということである。本願寺を飛び出した光瑞は、アジア諸国を漫遊し始める。法主辞任後の光瑞の行動を見ていきたい。『鏡如上人年譜』（鏡如とは大谷光瑞の法名である）によれば辞職後程なくして、神戸港解纜朝鮮半島經由奉天から大連、上海に向かう（漢口、南京、鎮江、杭州などを回る）。その後香港、シンガポールを経由しインドに渡る。インドからマレーシア、シンガポール、香港經由で上海に戻る。席を温める間もなく大連に行き、北上しウラジオストクに行く。その後また大連に向かい、青島に立ち寄り、上海に戻った。再び大連に向かい、漢口から上海に行く。そしてまたシンガポールからインドに向かい仏跡旅行を行う。三度上海に帰るが、南洋にまた出かけ、旅順に戻り、大連に滞在する。大連から日本の門司に行き、その足で台湾に向かっている。

アジアを駆け抜けた巨人

言うまでもなく大谷光瑞は親鸞聖人以来の衣鉢を継承する西本願寺の法主であった。西本願寺教団も明治という未曾有の荒波の中で、教団の近代化をはからなければならなかった。具体的には以下の三点を挙げることが出来る。教学の近代化、軍人布教、そして海外開教であった。大谷光瑞は、父親であった明如上人（大谷光尊、一八五〇～一九〇三）の海外開教事業をさらに発展させるために、アジア、とくに中国に積極的に開教活動を展開したことは知られている。光瑞の優れたところは現地主義者であったことである。自分の目で見、体験することで、中国を極東ロシアを南洋をトルコをインドを、そして中央アジア地域を深く理解することが出来たのである。

一八九九年（明治三十二）光瑞は初めての外遊を清国に求めた。およそ四ヶ月半、上海、杭州、香港、漢口そして何と言っても「前法主」「活き仏」「カリスマ的存在」であった光瑞は海外の本願寺門徒から絶大な人気を誇っていた。一九一五年（大正四）には香港本願寺、ウラジオストク本願寺起工式に参加するなど、自由闊達に飛び回っていた。

日本トルコ年

ところで今年（二〇一〇）は「エルトゥール号事件」から二〇年目の節目を迎えるが、幅広い分野での記念事業がトルコ国内で実施される。「二〇一〇年トルコにおける日本年」にも当たる。大谷光瑞に関する学会や展示会なども行われる。大谷光瑞とトルコとの関係は実にこの「エルトゥール号事件」と深く関係している。エルトゥール号事件とは、一八九〇年（明治二十三）日本との友好促進のために、トルコが派遣したエルトゥール号が帰途和歌山熊野沖で暴風雨に遭い難破し、使節はじ

大谷光瑞とアジア

知られざるアジア主義者の奇跡

柴田幹夫編
A5判上製・定価六八二五円（税込）

世界的視野をもった巨人、大谷光瑞の真相。

大谷光瑞の魅力と意義をアジアという地域性のなかに追求。ロシア、朝鮮、中国、チベット、トルコ、南洋など各地域との関わりを詳述するほか、建築、香、薬物、外務省外交記録など多角的な観点からの論考を多数収録。海外開教と学術調査の全貌を究明する。



第一部 大谷光瑞研究の実情と課題

第二部 大谷光瑞小伝

第三部 大谷光瑞とアジア

大谷光瑞と朝鮮／大谷光瑞とロシア／大谷光瑞と樺太

大谷光瑞と中国／大谷光瑞とチベット／大谷光瑞と南洋

建国の父ケマルパシヤのパートナーであった大谷光瑞と

土耳古国

第四部 大谷光瑞とその時代

本願寺の海外開教／大谷光瑞と本願寺六五〇年遠忌

上原太郎と大谷光瑞／大谷光瑞と本多恵隆らの時代と

坂の上の雲／二楽荘の建築に影響した英国の邸宅文化と

インドの僧院の景観／大谷光瑞と香・薬物・大谷学生と瑞

門会／言論人大谷光瑞の誕生／日本国外務省外交記録と

大谷探検隊の研究／大谷光瑞と別府

め五八一名の乗組員のほとんどが亡くなった事件である。その「弔魂碑」を認めたのは、誰であろう大谷光瑞であった。また光瑞はトルコ・ブルサで現地パートナー、ギョクチエン家とともに



光瑞書弔魂碑

に「日土合並織物会社」を設立し、古代からブルサの主要産業であった養蚕業、絹織物業の再興に努めた。またトルコ独立戦争に際して、ケマルパシヤを支援したこともよく知られていることである。

おわりに

今私たちが、飛行機に乗り、船に揺られ、列車の旅を満喫するように、今を去ること一〇〇年ほど前に大谷光瑞はそれをやっていた。また旅を十分に

満喫していた。驚嘆に値する出来事である。もちろんそんなことが出来る条件にも恵まれていた。彼が旅行を通じて実地に見聞したものは、本願寺や大谷光瑞個人のものではなくて、常に「国家の前途」を考えていたように、日本の政局の中に活かされたものであると信じた。



地名研究の恍惚と不安——「大江山」の場合

糸井通浩

（龍谷大学名誉教授）

京都地名研究会（会長・吉田金彦）は、来年創設十周年を迎える。勉強出版が引き受けてくださり、この間『京都の地名検証』1・2・3を世に問うた。会の年報『地名探求』も毎年順調に刊行している。しかし、地名研究は楽しいが難しい。そのほんの一例を披露してみたい。

（一）二つの大江山

地名といっても山名の場合、一つの山岳（嶺）名である場合と周辺の山々を総称して、その土地の名をつけて言う場合とがある。京都府には大江山が二つある。山城と丹波の境をなす大江山（大枝山）と丹波と丹後の境をなす大江山とであるが、ここでは、前者を

「山城の大江山」と呼び、後者を「丹後の大江山」と言うことにする。どちらも特定の山岳をさすものではなく、総称名である。後者の場合、大江山連峰とも言う。問題は、「丹後の大江山」にある。著名な小式部内侍の歌「大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天橋立」の「大江山」をめぐって、一昔前までは丹後のと見る説と山城のと見る説とが拮抗していたが、今では、この歌を含め古典和歌における歌枕「大江山」は、「山城の大江山」と見る考えが定着してきた。『京都府の地名』（平凡社）が「生野と詠み合わせているものは千丈ヶ岳であろう」とするが、そうは言いきれないのである。そして今言う「丹後の大江山」のことは、『和

泉式部集』の歌にもあるようにかつて「与佐の大山」（または単に「大山」と呼ばれていたと見ていいだろう）。

山の名が総称名の時は、その周辺の地名を冠している。その点では、「山城の大江山」の場合「大枝（京都市）」という地域があり、その背後の山々を指しているが、「丹後の大江山」の場合、「おおえ」と言う地域はなかった（「大江町」は昭和二十六年以降の地名。そこでいつからどのようにして、「丹後の大江山」と言われるようになったかが問題となるが、まだすっきりと分かっていないとは言えない。しかし、こゝとは「鬼退治」伝承と深く関わっているとされるのである）。

（二）三つの鬼退治譚

「丹後の大江山」は、直接には一つの山岳「千丈ヶ岳」を指すのが一般であるが、この山にまつわる鬼退治の伝承には三つある。（A）源頼光と

その四天王による鬼(酒吞童子)を退治する話。(B) 聖徳太子の異母兄弟に当たる麻呂子親王による三悪鬼退治の話(七仏薬師信仰が背景にある)。(C) 四道將軍の一人日子坐王による土着勢力の土蜘蛛「クガミミノミカサ」を誅する話。(C) は古く『古事記(崇神記)』が伝えるものであるが、『丹後国風土記残欠—加佐郡』但馬国司文書(ともに偽書とされる)もこの話を掲げている。これらでは「与佐の大山」と言い、「大江山」の名は見えない。

(A)の話は、謡曲「大江山」「羅城門」や、『大江山絵詞』『酒吞童子絵巻』など、絵巻ないしはお伽草子類が伝えている。山の名を「丹州(あるいは丹波国)大江山」とする。この名にどちらの大江山なのか迷わされるのである。「丹波道の大江の山の」(万葉集)であれば、山城・丹波の境の大江山。それが「丹州大江山」では区別がはっきりしない。しかし、問題の山が「都のあたりほど

院の縁起譚絵であることに深く関わっていると考え。中央では、「丹波の大江山」が山城のそれからいつか丹後のそれへと「語り」の舞台が動いたのではないか。

では、地元で「大江山」とは丹後の山と認知されたのはいつ頃からか。地元の資料「宮津領主京極時代宮津領峰山領絵図」(一六六二—一六六九の成立)に「大江山(千丈ヶ岳)」とあり、その傍注に「みうへヶ嶽」と付す。また「丹後与謝海図志(元禄二年)では「千丈ヶ岳」の外に「普甲山」を取り上げて「大山といふ名所也」とし、さらに「左の方に千丈ヶ嶽鬼ヶ窟あり、是をも大江山と言ふに」とし、小式部内侍歌の「大江山」は「老いの坂の事也」とする。どうやら江戸期に入って十七世紀半ばには、千丈ヶ岳を「大江山」とも言うという認識が成立していたようだ。まだ道遠し。推理を働かせながらの、恍惚と不安を伴う探究である。

近き」とされたり、「生野の道はなほ遠し」や「西川(桂川)」とのつながりで語られたり、盗賊出没の話題(『今昔物語集』『中右記』など)と結びついたりする場合の「大江山」は、「山城の大江山」であったと考えられる。一方、山の名を具体的に「千丈ヶ岳」とする場合は、「丹後の大江山」を指し、それと同時に酒吞童子の話が有名になればなるほど、丹波・丹後の境の大江山を指すようになったと観察される。

(三) 麻呂子親王の鬼退治譚

ところが、(A)とほぼ同時期に成立して江戸期になっても盛んに伝承された(B)では、「大江山」という山名は語られない(後世のごく一部の文献除き)。山の名は、もともと古い文献では「与佐の大山」(「与佐山」とも)であり、後にはもっぱら「みうへがたけ」(三上ヶ嶽)系の名(三上山、見上山とも)なのである。この名は「千丈ヶ岳」を「三

上(サンジョウ)ヶ岳」と書き、それを訓読みしたものと思われる。同じ謡曲でも「丸子」(十六世紀前期・長俊作)の古名が「みうへが岳」とされるように、この系列に同調して「大江山」としていない。注目すべきは「大江山」と「みうへが岳」とは異なることと見ているらしいこと。さらに、一部の資料には絵に「大枝山」と書き込んだもの(絵詞)があるが、これらは「みうへがたけ」という山と区別した注記で、「大枝山」は「山城の大江山」のことと見られる。

(四) 課題—「地誌」類への登場

(A)(B)ともに「丹後の大江山」の場合、「千丈ヶ岳」を舞台とする点では共通するが、その山を(A)では「大江山」とし、(B)では「与佐の大山・みうへが岳」とするというのはっきりした違いが見える。これは、(A)が中央(都)の「語り」であるのに対して、(B)が地方(地元)における「語り」(寺

京都学を楽しむ 古都をめぐる33の講座

知恵の会(代表…糸井通浩)編
四六判上製・定価三三七〇円(税込)

そうだ、この本持つて、京都、行こう。

京野菜、祭り、仏像、観光学、京気質、酒、京菓子…。

京都は伝統的な文化都市でありながら、たえず革新でありつづける。

そこに、京都学の大きな魅力がある。とっておき、ほんまもんの京都を楽しく知的に案内。



京都の地名検証 3 風土・歴史・文化をよむ

京都地名研究会編
四六判上製・定価三二五〇円(税込)

日本文化のエッセンス、「地名」の魅力。

安居院、閻魔前町、繁昌町、六波羅、千本通、撞木町、天の橋立…。

いま、消えゆくとしていた多彩で豊かな地名の数々。

それらを収集、検証し、無形文化として

後世に伝えていかなくってはならない。

好評シリーズ第三弾、完結編!!



京都の地名検証 2 風土・歴史・文化をよむ

京都地名研究会編

四六判上製・定価三二五〇円(税込)

京都の地名検証 風土・歴史・文化をよむ

京都地名研究会編

四六判上製・定価三二五〇円(税込)

随想 仏教の心とわたし

長野 一雄

(元 徳島文理大学教授)

両親が地方出の人だったせいとか、幼い頃の我が家には仏壇がなく、親が仏様を拝む姿を見たこともなく、お墓参りをしたこともなかった。

国民学校(昔はそう言った)低学年の頃、ひと夏を、母の里、松江市の伯父の家で遊ばせてもらった時、お盆の墓参りに一家総出で行ったのが、仏教に接した最初だった。ご先祖様、仏様との初めての出会いになった。

戦争が激しくなり、父親の郷里、三重県の山里へ縁故疎開した時、お盆や命日等に数回、伯父の一家とお墓参りに行った。伯父伯母は毎日仏壇を拜んでいるようでもなかったが、そういう時は、仏壇に花や供物を供え、線香を焚き、ローソクを灯して拜んだので、

は仏典の難解な語をそのまま使っているのが難しすぎるからである。色々な方々の本を読んだが、亡き中村元さんの書物を一番多く読んだ。

その結果、仏教説話は、空の境地を体得していくのに必要な、様々な心で分かりやすく説いたものだと思うようになった。

仏教の一番深遠な思想、教えは「般若波羅蜜多經」にあり、そのエッセンスが「般若心經」にある。その中心は「色即是空、空即是色」という難解な語である。

わたしに解く力はないが、学んだことは、この世の中の色や形のあるもの、いわゆる実体があるものは、本当は空であり、無であるということである。

そしてそれを体得するのが、知恵の完成であり、悟りの境地なのである。空は虚無ではなく、無いようであり、有るようで無いもの、とも解かれる。物理科学にも通じる深遠な哲学である

わたしもそれに習った。

戦争が終わり、大阪の家は焼失してなくなり、五年間吹田市で間借り生活をし、大変な時を経て、堺市で小さいながらも我が家を持った。まもなく母は、仏教のある会に入会、粗末な仏壇を置いて毎朝お経をあげるようになった。しかし、それは母だけの営みで、父をはじめ、四人いた子供の誰も拜んだことはなかった。

それから年月を経て、家も移転し、仏壇も立派なものになり、墓地も買った。母が亡くなり、父が亡くなった。母が亡くなった時から、お墓に参り、実家へ行くとまず先に、仏壇に線香を立てて拜むようになった。それはごく自然にできた仏教の営みだった。

ようなのだ。わたしは素人の考えで、物質や生命の根源は原子なるもので、それは在るのに、目には何も見えないことに通じるかと考えた。

ともあれ、この空を心に体得する上で、さし当って必要なのが、我にとらわれない心であり、「金剛經」がそれを説いているようである。そして、そのとらわれない心を体得するのに、五戒を実践する必要があると、わたしなりに考えた。五戒とは、「布施、持戒、忍辱、精進、禅定(心静かに瞑想)」であるが更にそれに付随して、幾つかの心のありようが説かれるのではなからうか。

例えば、薬師寺の写経を自宅で実践した時、書写する般若心經の裏に「般若心經のころ」として「かたよらないころ、こたわらないころ、とらわれないころ、ひろくひろくもつとひろく、これが般若心經空のころなり」とあり、「仏教の教え」として、「ま

お墓が遠いこともあり、兄弟姉妹が参りやすいようにと、母の死後、御堂筋本町の東本願寺別院へ分骨したので、退職後、暇のできたわたしは、大阪へ行くと思いつくままに参るようになった。わたしの仏教は、ずっと亡きご先祖の仏様を拜むことだけに終始していたし、つけ足すことがあるとする、有名なお寺にお参りすることくらいであった。

退職後、そのわたしも少し変わった。晩年をどう過ごすかという意識が芽生えたのと、**仏典説話集「経律異相」の現代語訳**をライフワークの一つと決めたことである。

天竺の仏典に載る説話を訳すからには、もつと仏教思想について知っておく必要がある。今までの勉強ではあまりにも貧弱すぎる、と思われた。

わたしは、県立図書館へ行き、仏教思想を紹介してくれている一般向きの本を次々と借りては読んだ。専門書

るい心の教え、明るい心の教え、清らかなる心の教え、静かなる心の教え、おかげさまなる心の教え、無我なる心の教え、大慈悲なる心の教え、安らかなる身と心の教え」と記してあった。

こうした勉強の結果、最初読んだ時は、何か理解しにくかった仏教説話が、分かりやすくなった。例えば仏典説話集「経律異相」の中に、山寺で悪鬼が出るという聞いた宿坊僧が、鬼が出るという思いにとらわれて、別の僧が来ただけになのに、鬼が来たと思いついで、どつきあいになった話がある。最初は、たわいない話と思つたが、これこそ、とらわれた心が平常心を失っていることを教える話だと理解するようになった。

また、出産のため、夫や子供と郷里へ帰る女性が、道中で夫や子供やお腹の赤子を失い、流され、やつとの思いで郷里に戻るものの、火事で両親が死んだと知り、狂乱してしまうが、仏の

×ルマガジンの登録申し込み・取り消しは、こちらから

仏典説話を現代語で読む

長野一雄 著

四六判上製・定価三九九〇円（税込）

読経では理解できない仏教の真髄。生々しい古代の物語から原始仏教の躍動感を感じる

天界地界人界地獄界のドラマチックな物語一五八話。

仏教理解に重要な説話「経律異相」を読みやすく解りやすい現代語で読む決定版。

身長三十万キロの四天王の話。

指から水を出し、五百人の飢えた商人を救った天女の話。

子供が自分の血肉を親に与えた話。

醜い女が美女に変化した話。

死んで虫となり、妻の鼻に住み着いた男の話など……。

第一章 天の世界の話

欲界の話／色界の話／無色界の話／天体・自然の話／天人・天女の話

第二章 地の世界の話

閻浮堤の話／閻浮堤の山、その他／閻浮堤の樹／閻浮堤の海河／閻浮堤の宝珠

第三章 人の世界の話

釈迦の伝記の話／釈迦の教導の話

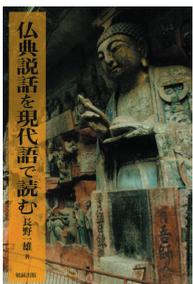
釈迦涅槃後の造塔・造像の話

釈迦に近い人びとの話／仏者の話

王や庶民の話／鬼の話／動物達の話

第四部 地獄界の話

閻羅王の話／地獄の話



説法で救われる話がある。
この時、仏がどんな話をしたか、記していないので、仏教説話としても足りなく思ったが、今では想像できるようになった。
肉親への愛にとらわれていては、安らかな心が得られないこと、肉親も元は何もなかった存在で、無から有になり、その有が無にかえった、という空の思想を説かれたに違いないのである。
わたしは、写経を少し行い、般若心経を机の前でたまたま唱える程度になったが、その内、母親がしていたように、毎朝唱えるようにしていきたいと思っっている。



戸板保佑編『関流四伝書』を巡って

佐藤賢一

（電気通信大学准教授）

近世数学の情報爆発

一体、人というものは一生の間にどれだけ、本当に必要な情報を収集することができるのであろう。現代は情報の方が向こうから押し寄せてきてあふれかえっている。この状況はたかだかここ十数年の間の社会現象でしかない。しかも、その情報の九十九%はおそらく、個々人にはさして必要のないものばかりである。

十八世紀末の日本において、数学（和算）の分野だけで五〇〇冊以上のモノグラフ、ページ数にして二万ページ近くにもなる情報を編纂・収集した人物がいた。『関算四伝書』全五一冊（二七八二年）の編纂者、戸板保佑（といやす）は、一七〇八一―一七八四）である

（正確に言えば、戸板は数学ばかりではなく、天文・暦学の叢書、約三〇〇冊（『天文秘書』、『崇禎類書』他）も編纂している。現在、天理図書館所蔵。

江戸時代の日本人による和算研究が、近代以後の日本の飛躍を実現させた。このような言説を近年、耳にする。その当否の評価はさておき、次のことだけは確認しておきたい。

和算といえど即座に「関孝和」の名前が浮かぶ。そして彼の研究成果こそが和算の心髄だと思われるだろう。しかし、関孝和が没した一七〇八年、そして直弟子の建部賢弘が没した一七三九年、この頃の関流の著名人物が著した数学書は多く見積もっても数十冊程度であった。それだけに、十八

世紀末に戸板が五〇〇冊以上の関連算書を収集していることは驚異である。十八世紀の数学においてこのような情報量の「爆発」のあったことは見逃せない事象であり、それ以後本格的に和算の知識が全国に普及展開していったことがうかがえる。その状況をまさに象徴しているのが『関算四伝書』である。なぜ十八世紀に、これほど膨大な数学的知識が蓄積されたのであろうか？

戸板保佑と山路主住

戸板は奥州仙台に生まれた和算家、暦学者である。名家である伊達氏に暦学者として仕えた。壮年になってから、主命で京都に派遣され、幕府が主導した宝暦の改暦（カレンダーの計算システムを改良する作業）に土御門家の門人として参加している（一七五三―一七八年）。その折に京都で知遇を得たのが、幕府から派遣された和算家の山路主住

小論・研究余滴・随想など本誌にはお寄せ願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。

(二七〇四―一七七二)であった。山路は関孝和の流れをくむ和算家で、当時を代表する数学者である。戸板と山路は改暦の作業を通じて意気投合し、戸板は地元の仙台で既に習得した中西流の数学から関流へと鞍替えし、山路から膨大な関流の知識・算書を継承した。京都からそれぞれの地元に戻った後も両人の交流は続き、山路の没した後もその弟子たちが戸板のいる仙台に向けて最新の和算書を発送している。戸板が没する二年前に一連の叢書は完成し、藩主に献上された。

『関算四伝書』の内容と編纂動機

この『関算四伝書』は、「前伝」、「後伝」、「要伝」、「完伝」の四つに分かれている(それ故に「四伝書」である)。これに取められた算書は、現在の小学生が学ぶような初等的な内容から、理系の大学生が初年次に学ぶような内容、当時の最先端の数学まで、網羅できる

紹介されたので、いまでも東北大学にこの史料があると誤解されているほどである。実際には戦後、『関算四伝書』は伊達家に返還された後、すぐに宮城県図書館に寄贈され「伊達文庫」の一タイトルとして現在に至っている。この間、五一一冊あった『関算四伝書』は何点かが散佚し、一〇タイトル前後が行方不明となってしまった。関係者の尽力により、それらの幾つかは再発見され、現在は五〇七冊の所在が確認されている。

ものはすべて収録したと思わせるほどのラインナップである。日本の数学ばかりではなく、『楊輝算法』(二七四年)のように宋代中国に由来する算書、そして西洋数学を取り込んだ漢籍である『数度衍』(二六一年)まで含まれている。関や建部が遺した和算の成果は確かに分量としては少なかったかもしれないが、十八世紀には経済的にも時間的にも余裕を持った階層が後継者世代として数学分野でも続々と現れ、数学研究の量的拡大に貢献した。別な見方をすれば、関や建部の数学の質は将来の研究の大量生産性を保証するものだったのである。この傾向に、享保の改革以後顕著となったヨーロッパの学術の流入が拍車をかけた。山路に代表される幕府周辺の和算家、天文学者たちは西洋の天文学・数学にも刺激を受け、さらに数学的知識の蓄積を進めたのである。

そのような流れの中で戸板は、後世このコレクションの全貌を把握したいと思いついたのは二〇〇一年のことであった。幸い、マイクロフィルム化する予算を確保して、長期休暇を利用して宮城県図書館に数年間通いつめた。当初はこの膨大なコレクションが影印となって刊行されることなど予想だにできなかったが、これもまた天佑を得て撮影開始から十年を待たずして、勉誠出版から『関流和算書大成 関算四伝書』として刊行して頂いた。

十八世紀の間に個人が収集した和算

の数学者に完全な形で当時の数学を伝えたいと念願していたことが彼の言葉の端々からうかがえる。あまりにも当時の数学には秘伝化されたものが多かったからである。それだけに、戸板は集められるだけの情報を徹底的に集めた。その思いが現実化したのが『関算四伝書』であった。

『関算四伝書』の流転

『関算四伝書』はこれまで一部研究者の間に存在は知られていながら、その所在が二転三転したために、いつしか幻のコレクションとなってしまうといった。編纂後の『関算四伝書』は、維新を迎えるまで仙台藩の書庫内に留まっていた。しかし、明治以後、このコレクションは伊達家から民間の図書館である仙台文庫に寄託された後、さらに東北帝国大学理学部に寄託され、戦後を迎える。東北帝大に寄託されていた時代にこの四伝書の存在が広く

史料としては『関算四伝書』を超えるものはない。稀覯書がふんだんにあり、それだけでも歴史的価値は非常に高い。数学の歴史を語る上でも、江戸時代の文化史を見る上でも不可欠の史料群である。そのような叢書を刊行したことで、戸板保佑の志をわずかながらでも引き継ぐことができたかもしれない。今は、出版に関わった者の一人として安堵している。



関流和算書大成 第一・二期

二〇一一年二月、第三期刊行予定!

東アジア数学史研究会 編

代表・岡本和夫(川原秀城/渡辺純成/佐藤賢一)

第一期 A4判上製三分冊・定価一〇八一五〇円(税込)

第二期 A4判上製五分冊・定価一七八五〇〇円(税込)

『関算四伝書』は、一八世紀後半に活躍した和算家が個人として編集した叢書としては、今のところ最大のもので、一七八〇年代までに編纂された関流の和算に関わる資料(写本)のほとんどを網羅している。掲載内容は、算術ばかりではなく、度量衡や軍事技術・農政などの算術の関連分野の稀覯書も含まれており、数学史研究のみならず日本文化史研究においても参照できる、非常に貴重な資料である。

関流和算書大成とは?
関孝和(？―一七〇八)に始まる「関流」の和算を体系的に概観することのできる唯一の基礎的資料である
戸板保佑(一七〇八―一七八四)編纂の『関算四伝書』を、広く研究の活用に応ずべく、その全篇を影印・刊行。



二〇二〇年九月刊行

金子みすゞ 永遠の抒情

詩と詩論研究会 編
四六判上製・定価二五二〇円(税込)

その詩が私たちの心に触れるのはなぜなのか。



なぜ、その詩は心に触れるのか。

金子みすゞの文学抒情性はどこにあるのか。研究者・小説家・詩人・俳人が結集し、ひとたび読んだら忘れることのできない、その詩のうちにある〈永遠なるもの〉を解明する。みすゞの詩をテーマにした挿画 小説も収録したユニークな論集。

◆みすゞの詩の抒情

杉山欣也／浜辺のいのち、その円環と抒情
井上文／金子みすゞから、伝えられるもの
小松史生子／金子みすゞ―情念のユートピア
槌賀七代／金子みすゞの詩の抒情
岩見幸恵／村上春樹『1Q84』と寺山修司「くじら霊異記」

◆みすゞの詩の母胎

武田昌憲／仙崎の思いと悲情
玉村 周／見えないもの―みすゞの詩の世界―
唐戸民雄／童謡詩人金子みすゞ 生の抵抗

◆みすゞの詩を読み解く

小林和子／金子みすゞに求める優しさとは
志村有弘／金子みすゞの詩の物語性
中沢 弥／たれか知らない旅のひと

◆小説

堀 勇蔵／一人芝居
栗原治人／小説・金子みすゞ



好評既刊

金子みすゞ

母の心 子の子

詩と詩論研究会 編
四六判上製・定価二五二〇円(税込)

母・父への追慕、命を賭した我が子への思い―

母に愛されたかった幼少時代。

亡き父への追慕、命を賭して守った我が子。

みすゞにとって「家族」とは何だったのか…

みすゞの家族愛を多角的に論じる。

金子みすゞ

こだまする家族愛

詩と詩論研究会 編
四六判上製・定価二五二〇円(税込)

他作家との対比で浮き彫りになる家族への愛―

両親への思い、故郷への思い…

金子みすゞの描く家族愛を、様々な作家、

また彼らの作品と比較することにより、

いつそう鮮やかに浮かび上がらせる。

蒲焼・柳川鍋・すき焼き・もつ焼き(二)

くいものの語源と博物誌

小林祥次郎

〇もつ焼き

蒲焼に比べるとだいぶ落ちるが、もつ焼きとホルモン焼きも同じ焼くものなので、いっしょに扱うことにする。

もつ焼きの具と言えば、レバー・タン・ハツ・軟骨などだろう。

レバーは liver (肝臓)、タンは tongue (舌)、ハツは heart(心臓)、どれも英語だ。

レバーは、明治三十七年に出た村井弦斎『食道楽』(冬の巻)に、「レバーと云って犢の肝臓のお料理があります。」とあるのが、わたくしの知った最古の例だ。

タンはタンシチューとある例が古く、作家になる前の夏目漱石が、俳誌『ホトトギス』の明治三十一年十一月十二月号に載せた「不言之言」に、「わ

れ平生齷齪として講筵に列し妄りに無用の舌を鼓して諸生を蠱惑す。…引き抜かれて「タンシチュー」と運命を同

うせず。是希有の饒倖なり。」と書いている。『食道楽』(春の巻)にも「シ

チューには牛の舌をお買ひになつてタンシチューをお拵へなすつても沢山出

来てお徳です。」とある。ただタンだけ使ったものは見えず、同書(夏の

巻)の付録の西洋食品価格表の犢の中には、「タンク 舌」とある。『日本国語大辞典』には、タンが昭和五年の『ア

ルス新語辞典』にあると記す。あらかわ・そうべる『外来語辞典』には、寒川鼠骨『犬と余』にあるとある(この作品の成立については残念ながら未確認)。荒川惣兵衛『角川外来語辞典』に

は、ハツの例が一九六一年一月十七日の『中日新聞』に見えるとある。

タンシチュー、レバーは、明治になつて西洋料理の世界で使い始めたものだろう。タンはシチュー以外、たとえばもつ焼きなどに使うようになって一般化したものか。ハツももつ焼きから広まったとしておきたい。あるいは屠場関係から出たものかとも思うが。

〇ホルモン

昭和四十年代のころ、小学生だった姪が、理科の授業でホルモンを習った時に、「ホルモン焼きのホルモンですか。」と質問したという。それを聞いてわたくしも笑ったが、実はそのころのわたくしも、それに近いものと思っていた。そのころにはホルモンという語には強精剤というようならちよつといかがわしげなニュアンスがあつたからだ。ホルモン焼きは、食い倒れの街、大阪あたりで始まったものと思つてい

メールマガジンの登録申し込み・取り消しはjkan.jp

た。昭和二十六年に坂口安吾が「道頓堀罷り通る」(『安吾の新日本地理』所収)に、東京浅草に「ホルモン焼き」があることを記した後に、

ところが、大阪は新世界のジャンジャン横丁を歩いたら、おどろいたね。ここはホルモン焼きの天国だよ。：数丁にわたるジャンジャン横丁全体がホルモン焼きの煙と匂いにつつまれ、どの店も立錫の余地もなく労働者がホルモン焼きの皿をかかえてムシヤぶりついている。どの店の看板にもモツ焼きなどと本来の名はなく、ただハッキリとホルモン焼き。

と書いている。同じ年の林芙美子の絶筆の『めし』にも、ジャンジャン横丁を、

ごみごみとした狭い道筋を、両側とも同じような店並が続いている。すし、うどん、串カツ、マージャン、

動物の内分泌臓器から作るそうだ。

敗戦後の食糧難の時代に、高価な肉だけでなく、放り捨てていた臓物も普通に食うようになり、以前からの内臓の料理のホルモンを引き継いでホルモン焼きと言った。そこには放る物という気持ちもあったのかもしれない。いわば折衷案と言うべき説を出しておく。



将棋クラブ、カイトン焼き(たいこやき)、ホルモン焼き、一杯五円の黒蜜、姓名判断に、葉屋。丁度、東京の池袋界隈にそっくりである。

と描いている。

語源は放る物で、普通なら放り捨ててしまふ臓物ということだと言われている。牧村史陽『大坂ことば事典』(昭和五四年)に、「ホル(動) 投げる。捨てる。投げやりにする。ほうる『抛る』の約まった語。」として、江戸時代の例があがっている。この辞典にはモン(物・者)も出ていますが、モノをモンとというのは全国的なことだろう。

ところが、ホルモンという食物は、もつと古くからあった。

喜劇役者である古川ロッパの日記の昭和十一年十月十七日の条に、「林・堀井・石田で山水楼へ、三円の定食珍しいものが出てよろしい。豚のホルモンてのが出たら、それと皆ハリキッ

た」とある。山水楼は日比谷にあったものか。そうであれば東京でのことだ。月刊誌『料理の友』の昭和十五年二月号に「ホルモン料理」という記事があり、牛・鶏・魚の内臓を使ったフランス料理が紹介されている。昭和二十年代以後のホルモン焼きよりかなり贅沢なものようだ。

本来の意味の Hormon (ドイツ語) は、一九〇五年に消化管ホルモンのセクレチンを発見したイギリスのE・H・スターリングが、刺激するものの意で命名したもので、日本では大正十五年の『哲学大辞書(追加)』に出ているそう(あらかわ・そうべゑ『外来語辞典』)。そのころから日本でも知るようになったのだろう。大きい国語辞典では、昭和十一年の『大辞典』に見える。

臓物の料理をホルモンと言ったのは、その料理がホルモンとかかわって勢力を強めるものということだったのではないか。ちなみに、ホルモン剤は

二〇一〇年九月同時刊行 ネットワーク時代の図書館情報学

デジタル書物学事始め

安形麻理 著

四六判並製・定価二〇〇円(税込)

デジタルによって広がる書誌学の可能性——書物研究という面から見ると、書物とデジタル技術という組み合わせの前には、明るい展望が開けている。デジタル画像やコンピュータを活用した「デジタル書物学」の「現在(いま)」を紹介。

- 第1章 活版印刷術の誕生/第2章 解体・ゲーテンベルク聖書
- 第3章 書物研究とデジタル画像/第4章 デジタル画像を用いた校合手法
- 第5章 デジタル画像を用いたゲーテンベルク聖書の校合/第6章 デジタル書物学の今後

情報管理と法 情報の利用と保護のバランス

新保史生 著

四六判並製・定価二〇〇円(税込)

現在のネットワーク社会では、日々様々な情報が大量に利用されている。それが当然の状況になつていて、一方で、情報の利用や管理をめぐっては、名誉、肖像、個人情報、プライバシー等の個人の人格的利益の侵害や、著作権をはじめとする知的財産権の侵害をめぐる問題など、多種多様な問題が生じている。

本書では、ネットワーク時代における図書館情報学をめぐる問題について、法的視点から情報の管理と法に関する問題について検討する。

- 第1章 高度情報通信ネットワーク社会の基礎となる法制度/第2章 情報公開法
- 第3章 情報の保存に関する法令/第4章 知的財産の保護に関する法令
- 第5章 個人情報の保護に関する法令/第6章 図書館サービスと個人情報の取扱
- 第7章 図書館が保有する情報への本人関与/第8章 図書館における過剰反応
- 第9章 個人情報保護とプライバシー保護対応の区別/第10章 情報管理技術と法
- 第11章 情報管理のためのマネジメントシステムの活用
- 第12章 情報のフィルタリング/第13章 ウェブ・アーカイビングと法的課題

◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換払*・クレジットカード**等がご利用いただけます。
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

① 銀行振込の場合

三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュッパン(カ)

② 郵便振替の場合

00120-3-41856 勉誠出版株式会社

* 代金引換払の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

** クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書き
いただければと存じます。

◆ 執筆分量・誌面二頁（一五〇〇字程度）ないし三頁（二三〇〇字程度）

写真などが入る場合は、文字数をそのぶん減らしてください。
四〇〇字を目安に、適当な小見出しをお付けください。

◆ 入稿形式・テキスト形式（ワード、一太郎形式も可）

◆ 謝礼・ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。
ポイントは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先： nminfo@bensey.co.jp
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

先日、弊社の書籍の管理をさせていただいている倉庫に見学に行って参りました。
入社以来、初めて行ったのですが、あんなに大量の書籍を一度に見るのは生
まれて初めてのことで、書籍が見渡す限り置かれているのは圧巻でした。
普段こちらからお願いしている指示が、どのように作業されていくのかがよく分
かり、いい勉強になりました。

毎日、電話で話している事務の方と、三年目にして初めて対面したのですが、文
通相手に直接会うような感じで面白かったです。

直接お会いする事により、自分の作業にミスが出ないように細心の注意を払おう、
お互いの作業がスムーズに行くように心配りしよう、とより強く思いました。
実際に対面するというのはとても大事なことだな、と改めて感じました。

しかし、何よりとにかく倉庫内は暑い！こんなに暑い中で作業していただいで
いると思うと頭が下がる思いでした。

倉庫にある書籍がより少なくなっていくように、魅力的な書籍を今まで以上に
刊行できるようにがんばっていきこうと、気持ちを新たに引き締められた一日で
した。

(武)